

教育における「意味」と「価値」の探求

— エドワード・リードの生態学的経験科学を通して —

山本 一成

1. 経験の記述理論を問い直す必要性—教育実践研究の発展へ向けて

教育実践は、子どもによって生きられた経験の意味や価値を理解しようと努めることで向上していく。教育実践研究は、その探求の助けとなるものであり、常に批判的に問い直されていくことで発展する。教育実践研究を問い直すためには、経験を記述する方法についての批判的検討だけでなく、その記述理論が前提とする認識論についての考察がなされていく必要がある。子どもの経験を記述する方法が、どのような経験観に基づき、子どもの経験のどのような側面を切り取るのかについて反省することが、教育実践研究を発展させる原動力となる。

これまでの教育学の歴史の中で、教育実践研究が主観と客観の二元論に基づき、子どもの経験について、「客観的に」観察された事実のみを記述する方法を用いてきたことについては、主に現象学の立場から重要な批判と反省がなされてきた〔津守ら（1999）、鯨岡（1999）〕。これらの批判に共通するのは、観察の「客観性」を前提とする経験科学が、子どもの経験世界の意味を捉えそこなうものであるという点である。現象学にとって経験とは、主体によって生きられた主客未分化な根源的現象であり、意味や価値を抜き取られた形で「客観的に」記述できるものではない。現象学が提起した経験の意味と価値についての議論は、教育実践研究を問い直す上で重要な問題提起であったといえるだろう。

一方、ギブソンによって提唱された生態心理学の立場も、人間の経験を感覚与件の解釈として捉える客観主義心理学を拒否し、アフォーダンスという概念を通して主観と客観の二元論を克服しようとした。ギブソンによると経験とは、客観的な刺激を脳が解釈して生じるものではなく、環境の意味や価値を直接知覚することで生じるものである。生態心理学は、現代の経験科学が前提とする認識論について、現象学とは異なる仕方から根本から問い直そうとするものであり、子どもの経験の理解を目指す教育実践研究に対しても重要な示唆を与えるものである。

本論文は、ギブソンの生態心理学を発展的に継承したエドワード・リード（1954-1997）の「意味」と「価値」の記述理論を、教育実践研究の理論として捉え直し、その可能性と限界を検討することを目的とする。リードは、著書『アフォーダンスの心理学』において「意味」と「価値」を含んだ経験の科学として心理学を再定義する試みを行った。『アフォーダンスの心理学』は、知覚心理学や発達心理学の領域内において新たな理論として注目を集めたが、通常、教育実践研究の理論として扱われることはない。しかし、リードの経験の記述理論は、同時期

に書かれた2つの著作における経験の哲学を参照することによって、教育の実践理論として解釈されうるものとなる¹。本論文では、リードの経験概念が、ダーウィンの「アンダーグラウンド心理学」の思想、ジェームズとデューイのプラグマティズムの思想の影響を受けて形成されたものであることを示す中で、「意味」と「価値」の記述が経験の共有と成長を目指す実践的志向をもつものであることを明らかにする。このことは、リードの生態学的経験科学を教育実践の記述理論として再評価するものであると同時に、意味と価値への探求として教育実践研究を捉え直す視点を提供することになるだろう。

以上の論述を行うにあたり、まず第2節において、生態心理学がとる直接知覚論の立場とアフォーダンスの概念について説明し、リードが記述することを目指した「意味」と「価値」との「出会い (encounter) ²」について明らかにする。またアフォーダンス理論が、経験世界を行動の記述に還元することになるという批判についても言及する。次に第3節において、先述した批判に対して、リードの経験概念が個別的生のリアリティの理解を目指す志向を持つものであることを明らかにする。ここでは、リードの経験概念を先の批判から弁護する一方で、リードの経験の記述理論が、個別的な生のリアリティを認めつつ、外部からの観察によってそれを記述しようとするという、パラドクスが明らかになる。第4節では、リードの理論が、経験の共有と成長へ向けた実践の文脈の中に置かれることで、記述のパラドクスを乗り越えるものであることについて論じる。以上の考察を踏まえ、第5節ではリードの経験科学を「意味」と「価値」の探求の理論として位置づけ、その教育実践研究としての意義を明らかにする。

2. 生態学的に経験を記述する－「意味」と「価値」を含んだ経験科学の構築

(1) ギブソンの直接知覚論とその継承

リードの記述理論を理解する前提として、まずはギブソンのアフォーダンス概念について確認する。アフォーダンスとは、環境に存在し、動物に行為の可能性を提供する情報である[Gibson (1979): 138]。たとえば、水平で、平坦で、十分な広がりを持ち、なおかつその材質が動物の体重に比して十分に堅い表面があれば、それは支える (support) というアフォーダンスを持つ。このような表面が人の膝ほどの高さの段差を持っていれば、それは座ることをアフォードするだろう。アフォーダンスは環境と動物との関係として測定されるものであり、環境の事実であると同時に行動の事実として捉えられる [ibid.: 139]。

リードはアフォーダンス理論の重大な革新は、情報を生態学的なものとして捉えたことであると述べる[EW:10]。現代心理学は心身二元論に基づき、物質的世界から与えられる刺激を人間の心が解釈することによって心的表象や経験が生じると考えてきた。このような考え方に従えば「情報」は物的環境から与えられた刺激の意味を解釈することによって生じるものとなるだろう。一方、ギブソンにとって情報とは、あらかじめ環境に存在し、動物の行為との関係の中で構造を持ち、直接に知覚されるものである。たとえば、私たちが部屋を歩きながら椅子を見るとき、私たちの目に映る光学的な配置は常に変化し流動しているが、その配置の中には、相対的に不変な構造 (ギブソンの用語でいう「不変項」) が存在している[Gibson (1979): 78]。私たちはそのような構造をピックアップすることで対象を知覚しており、その構造には「座る

ことができる」や「登ることができる」という意味が内在している。環境の情報は、それと関わる動物の関心に基づいて知覚されるものであり、生態学的な意味を備えたものなのである。

(2) リードの経験の記述理論

以上のように、ギブソンは動物の知覚を、生態学的情報に基づくアフォーダンスの知覚として説明する理論を構築した。そしてリードはギブソンの理論を引き継ぎ、人間の日常経験を理解する科学として展開することを試みた。リードが『アフォーダンスの心理学』において目指したのは、日常経験の「意味」と「価値」を扱う心理学であり、人間の「生のリアリティ」を扱う新たな経験科学である[EW:10]。

リードによれば「意味」とは、生物の生態的ニッチに情報として具現しているものであり、「価値」はそれらの情報が特定するアフォーダンスとして具現している[EW:201]。たとえばカサ貝がその天敵であるエッチェウバイから逃げるか、逆に攻撃をし返すかはそれぞれの体長比に依存していることが明らかになっているが[Branch (1979)]、ここでの相手が何であるかという「意味」は体長比という情報に具現化しており、その情報が特定する「逃げる」「攻撃する」というアフォーダンスはカサ貝にとっての生存上の「価値」の具現化であると説明できる。動物の知覚とはこのように、自らの生存や適応に関わる環境の「意味」と「価値」を能動的にピックアップする行為として捉えられる。

通常、生物はさまざまな「意味」(情報)に囲まれて生活しているが、利用される情報はその一部である。たとえば、草むらで食事をしているレイヨウは、草と、草むらの向こうにいるライオンを同時に意識しつつ、ライオンが危険な距離に近づいてくるまではライオンの情報によっては行わないことを選んでいる[EW:217]。食べることと逃げることを可能にする情報は同時に意識されているのであるが、「食べる」「逃げる」という行為は、自らの関心とニーズに基づいて環境の「意味」を実際に利用することによって実現する。このことがアフォーダンスの実現 (realization) であり、「価値」の知覚が「意味」の知覚から区別される重要な点である。

そして、人間の場合、どのような「価値」を利用するかは文化的に制限されている。たとえば、空腹の動物は目の前に食べ物があればそれを食べるだろうが、人間はたとえ空腹であれ、スーパーに陳列されたイチゴを食べることはしない。しかし、幼い幼児を初めてスーパーに連れていくとき、その子どもは何もわからずに陳列されたイチゴを口に入れてしまうかもしれない。人間はどのような行為がその文化において適切であるのかを学ぶことで、集団での生活を可能にしている。環境のどのような「意味」と「価値」が利用可能であるのかを共有すること。これをリードは、「意味と価値を求める努力の集団化」[EW:230]と呼び、どのような「意味」と「価値」が選択されていくかを記述することで人間の経験を理解することができると考えた。

以上の記述理論は、人間の経験を理解する方法が、動物の行動を理解するのと同じ方法と概念によって展開されなければならないという立場に基づいて構築されたものである[EW:200]。人間はその生きる道 (way of life) において他の動物と明確に異なるが、自然という共通の資源を利用する中で生きていくことに関しては他の動物と同様である。動物がそれぞれ多様な環境世界で、多様な意味と価値と関わりながら生きていくのと同様、人間の経験もそれらの環境の事物と関わることを条件にして生じているのである。「意味」と「価値」を含んだ経験の科学

は、人間—環境の相互作用の中で起こる行動の記述と、適切な解釈学的研究とを組み合わせることによって可能になる。そして、その記述と解釈の単位がアフォーダンスの実現、すなわち環境との「出会い」なのだ[EW:397]。

リードは、人間を自然の一部として捉え、動物の行動の科学と同じ方法で人間の経験を科学しようと試みた。しかし、このことは、人間を、動物と同じく環境に拘束された貧しい世界に生きる存在へと貶める思想であるという批判を招くかもしれない[Heidegger (1983): 291]。人間は動物と異なり、道具を作り、意味世界を形成する。「出会い」という行動の記述によって、人間の持つ豊かな経験世界を理解することはできないのではないかという批判は十分に想定されうる。以上の批判に答えるためには、リードの「経験」概念をより詳細に検討し、その記述理論がもつ可能性と限界を見定めていく必要がある。以下ではリードが哲学的な立場から記した残りの2つの著作を参照しつつ、リードの経験科学の射程を探っていきたい。

3. 多元的リアリティをもつ経験概念の再興 - 自然的魂の思想史から

リードが『魂から心へ』で描くのは、心理学における「魂」の抑圧の歴史とその解放の試みである。「心理学を開放してより広い経験概念へ導く」[SM:16]ことこそが、リードの思想史的研究の目的であった。結論を先に述べれば、リードが目指した「より広い経験概念」とは、ウィリアム・ジェームズの「生きられた経験」の概念を継承したものである[SM:303]。ジェームズは、経験とは、ときに人が「魂」と呼ぶような力によってもたらされる神秘的内容をも含むものであると考えていた。リードは、心理学はそのような「生のリアリティ」を含んだ経験を、研究対象から排除するのではなく、人間の豊かな生の諸相として適切な形で扱っていくべきだと主張した。以下では、「魂」の心理学がどのような形で生じ、また抑圧されてきたのかについて本書の内容を追うことで、リードが目指した経験概念について検討する。

(1) 心理学における「魂」の抑圧

『魂から心へ』で明らかにされているのは、19世紀末の「新心理学」の勃興に伴い、「魂(soul)の科学」という夢が徹底的に否定され、この「魂の科学」に代わって「心(mind)の科学」が勝利をおさめることになったという歴史である[SM:302]。たとえば現代の生理学に大きな影響を与えた反射理論は、19世紀の終わりにチャールズ・シェリントンによって確立されたものとされているが、脊髄反射の仕組み自体は、1740年代にスコットランドの医者、ロバート・ホイットのカエルを使った実験によって解明されていた。シェリントンの反射理論とホイットの反射理論はほとんどの点で同じ説明をしているが、ホイットの理論が受け入れられなかったのは、脊髄反射の事実を、「魂」に類似した感覚原理が脊髄全体の中に分散されており、それが感覚刺激を感じることで運動を生じさせていると考えたためである [SM:25]。下等な動物に、「分散された」とはいえ「魂」を認めることは、万物の霊長として創造された人間の地位を貶めるものであり、当時の神学の立場からは認めることのできないものであった。

19世紀中頃のヨーロッパでは、哲学と科学は教会と国家を支持するものでなければ公刊されることが難しかった[SM:32]。教会と国家は人間のみに魂を認める「科学的結論」を正統なも

のとして位置づける一方、動物や自然に生きた「感覚 (sensitivity)」や「感じ(feeling)」³を認めようとする思想を非正統なものとして抑圧してきた。そのような抑圧はホイットの例にとどまらず、リードが「アンダーグラウンド心理学」と呼ぶ思想系譜に共通するものであった。たとえば、チャールズ・ダーウィンの祖父であり、進化論に影響を与えたエラズマス・ダーウィンは、他者や世界との結合を希求するエロスの「感じ」こそが、進化の上で決定的に重要な役割を果たしたのだという世界観を、詩という形式によって表明していた。さらに、ダーウィンの影響を受けた、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』や、パーシー・シェリーの『感覚植物』では、物質に内在する魂が自分に欠如しているものを満たそうとすること（エロス）によって、生命が動機づけられているという思想的立場が表明されていた。彼らに共通しているのは、「観念と連合したかたちで生じている様々な感じこそ、観念が生み出される際にも、観念が生み出された後でも、観念の起源や意味よりも重要なものだ」[SM:87、傍点筆者]という、「自然化された魂 (naturalized soul)」[SM:253]を探求しようとする志向であった。

リードは、彼らが詩や小説という形式で表現した思想を、有機体の「感じ」を基礎とする「魂の科学」の構想であったと捉えている。それはダーウィンが「有機体の幸福 (organic happiness)」[SM:92]と呼んだように、人間の経験を、物質によって条件づけられ、エロスのに生成するものとする思想である。ダーウィンやシェリーらの思想は、多元的で自然的な魂の力によってもたらされる生の意味を扱おうとした“心理学”の系譜であったと捉えることができるのだ。

(2) 魂と切り離されることのない経験

そして、リードが「アンダーグラウンド心理学」の系譜をたどる先に見出すのがジェームズの経験概念である。ジェームズは一般的に、アメリカにおける現代心理学の父として位置づけられているが、彼はヴントやヘルムホルツに代表される当時の「新心理学」に対して反対の立場をとっていた。ジェームズはデカルト的な心身二元論に基づく「新心理学」の立場が、人間の経験を刺激に対する脳の基礎的反応に還元することを批判していた。「新心理学」にとって人間の経験とは、環境からの刺激を感覚器官が受け取り、それを脳が統合することによって主観的に生じるものであり、感覚は原子的で点的な経験の要素として捉えられる。これに対しジェームズは、一見単純に見える感覚でさえ実は複合的であり、それは要素の結合ではなく、流れという形態をとるものであると考えていた。心は要素の連合ではなく、常に一つの全体として現れるものであり、経験の豊かさは還元主義によっては捉えられないとする立場である [James (1912): 128]。また、当時の新心理学は「有用な神経放電」、「適切な方向づけ」、「正しい反応」といった概念を用いることによって、行動的価値を含む高次の心理過程と低次の心理過程を区別していた。ジェームズは論文「わたしたちは自動機械なのか」(1879年)においてこれを批判し、「有用」「適切」「正しい」という用語が、人間にとっての善さや目的といった「関心」を前提にしていることを指摘した。刺激－反応という単なる物質的過程それ自体において善さは生じ得ない。もし物質的・機械的宇宙において価値が生じるとすれば、そこには個体の関心が働いている。そして関心とは、個体が事物に対して持つ感じ (feeling)を前提としたものである [James (1899): 3]。

ジェームズの経験についての考え方は「アンダーグラウンド心理学」が追求しようとした、

自然的で多元的な魂についての考え方と共通する部分をもつ。経験とは、生物が固有の関心によって世界と出会うことであり、そこには生きた「感じ」が伴っている。そして、生物それぞれの関心は「核心的秘密 (vital secret)」[ibid.: 4]を有したものであり、経験世界は多元的な豊かさをもつものである。

(3) 多元的经验の記述とパラドクス

リードは、ジェームズの経験概念を継承することで、経験がそれぞれの主体の feeling に根ざした多元的豊かさをもつものであると考えていた。このことは、リードの心理学が人間と動物の経験を同じ方法によって扱うことによって、人間の経験の豊かさを外面から観察される行動に還元しようとしたのではないという根拠となるだろう。このような経験概念に基づいて、他者の経験を記述しようとするのであれば、記述者には他者の内面的世界に対して、尊厳を持って近づこうとする態度が求められる。ジェームズが述べるように、「私たち自身の実存を超えて、(他者の) 実存の形式の意味のなさについて言及すること」[ibid,26]は、絶対に許されない。経験の記述という実践的文脈に限れば、動物の経験世界を貧しいものであると判断することは、経験不可能なものに対して価値判断を行う行為であり、他なる者の経験を理解しようとする探求を停止させるものである⁴。人間の経験であれ、動物の経験であれ、他なる者の世界を理解しようとするとき、用いられる方法は同じものでなければならない。環境の「意味」と「価値」との出会い、人間と動物が共有する事実であり、研究されるべきはその「出会い」の仕方にあるというのが、リードの経験の記述理論がとる立場である⁵。

リードが目指したのは、他者の経験世界の無限の豊かさを認めつつ、それを理解しようと試みる科学である。しかし、ここには記述という方法に関わるパラドクスが生じるように思われる。「無限の豊かさ」を「記述」することは、原理的に不可能である。そうであれば科学は他者の「魂」、「核心的秘密」、「生のリアリティ」については、探求を放棄し、目をそらせるべきではないのか。他者の経験を記述することは、それを記述する主体の側の理解に還元することになるのではないのか。リードの「意味」と「価値」の記述が持ちうる可能性を判断するためには、3つめの主著である『経験のための戦い』の内容を検討する必要がある。リードの思想が、経験の成長という実践的志向をもつものであることを明らかにすることで、経験の記述が、他者にとっての「意味」と「価値」を共有することを目指す、終りなき探求として捉えられることについて論じていきたい。

4. 経験の成長へ向けた探求 - 記述のパラドクスを超えて

(1) 直接経験と経験の共有

『経験のための戦い』の中でリードが試みたのは、プラグマティズムと生態心理学の思想をつなぎ合わせ、経験の成長を目指す生態学的な実践哲学を構築することであった。リードは、経験の連続的再構成こそが個人の成長と民主的な社会の創造の過程であると考えたデューイの思想を引き継ぎつつ[Dewey,1916]、現代を生きる私たちがそれを実践する必要性を主張している。私たちが経験を成長させていくためには、他者と経験を共有するコミュニケーションを通

して、自分自身が変容していかなければならない。リードは他者と経験を共有するために必要なこととして、以下の2点を挙げる。ひとつは、直接経験と間接経験を適切な形で組み合わせることであり[NE:21]、もうひとつは間接経験を導入する前にあらかじめ直接経験を重ねておくことである[NE:13]。リードは、生態心理学の概念を、経験の成長のための実践的な概念として用いようとする。

ここで、生態学的情報に基づく直接経験と、処理情報に基づく間接経験の差異を確認しておこう。生態学的情報は、私たちが、自力で見、触り、味わい、聞き、嗅ぐことのできる情報であり、環境に存在している。生態学的情報は生物との関係において知覚され、様々なアフオーダンスを提供する。生物にとっての「意味」は生態学的情報に具現化しており、その知覚によってもたらされる「出会い」は固有の「感じ」を伴って経験される内面的生の基盤(basis)である⁶。一方、処理情報は誰か別の人によってすでに選択された情報のことを指す。身近な例で言えば、本に書かれた内容やコンピューターを流れる動画は、他者がその内容を選択・編集しているという点で処理情報である。また、他人から伝え聞いた友人の言葉や、メールに書かれた言葉なども、処理情報の一種として分類することができるだろう⁷。メールでのやりとりが面と向かって話をする場合よりも誤解や対立を招くことに見られるように、処理情報はその精査の可能性がすでに限定されたものである。処理情報は、過去の記憶や知恵を伝え、遠く離れた場所に情報を伝えることができる点で有用であるが、対面的なコミュニケーションにおける表情や雰囲気、声の抑揚といった生態学的情報は、ここでは捨象されることになる。

リードが指摘する直接経験の最も重要な特性は、生態学的情報の探索が自らの仕方で行われ、その精査に限りがないという点である[NE:131]⁸。生態学的环境には、五感を用いて知覚される情報が無数に存在し、私たちはそれを探索することで、新たな環境の「意味」や「価値」と出会うことになる。「出会い」はその人が自らの関心に基づいて環境を探索することで実現(realize)するものであり、「出会い」が持つ固有の事実性=リアリティ(reality)は、独自の仕方でも探索することによって確証されるものである。それゆえ人々がもつ世界は多様になる。

自分と異なる世界観をもつ人と経験を共有していく上で、本を読んだり、インターネット上で交流したりすることは重要な意味をもつ。しかし、そのような間接情報が意味をもつためには個人の豊かな直接経験の土壌、すなわち、自らの仕方でも実現した「出会い」とそれに伴うリアリティが必要なのである。一方、直接経験に閉ざされているだけでは、経験の成長は実現しない。互いのもつ独自の経験世界を認めつつ、他者にとっての世界を感じ理解していこうとすることで、経験が成長していくことになる。リードが目指したのは、多元的な世界観に基づきつつ、他者と経験を共有することを求める、コミュニケーションの社会思想であったと言える。

(2) 生活への愛と経験の共有

そして、リードが直接経験に基づき、経験を共有するための道筋として提示するのが「生活への愛(love of life)」[NE:161]である。リードは、「人間として生きることは、世界におけるその人の場所を、周囲の事物と周囲の人々の両方を楽しむ(enjoy)特別な方法として経験することである」[NE:172]と述べ、喜び(joy)が世界との関わりの中で直接に経験されるものであると考えた。喜びの感じは内的に経験されるものであると同時に、「環境中のわれわれの場所に

関する価値づけから切り離されない」ものである[NE:168]。そして、人間にとっての喜びはありふれた生活の中に眠っている。畑仕事や料理、裁縫や音楽といった活動は、その人自身の仕方では環境と触れ合うことを楽しむことであり、活動の生産性や有用性を越えたその活動自体としての喜びを有している。それは、「生きられた経験の喜び」、「〔事物や他者との〕出会いや効用の快感」としても言い換えられるように、日常生活の中で実現するものである[NE:170]。

そして、人々をそのような「出会い」の喜びへと導く、根源的な動機づけが愛である。ギリシア哲学の時代以来、エロスは、より高く、自分に欠けるものを探し求める衝動として考えられてきた。ここで想定されるアイデアは不完全な人間の感覚によっては捉えることができず、経験はこの真理にたどり着くことができない。しかし、生態心理学の観点から見れば、「価値」は環境に存在し、人間の喜びは環境との「出会い」において無数の形で実現していると考えられることができる。人間は、ありふれた生活の中でさえ、身近なものに価値を見出し、身近な他者と経験を共有することに喜びを見出していく。私たちは、生活の中に、生きていることの喜びや、人生の喜びを感じる通路を持っている。リードは、そのような「生活への愛」こそが、エロスの本質であると考えた[NE:168]。愛は、ソクラテスが言うような「魂とアイデアとの霊的な結合」ではなく、フロイトが言うような「性的一体感への欲動」でもない。愛は、身近な他者や事物との「出会い」の喜びであり、性的一体感はそのような喜びの中のひとつにすぎないのだ。

「生活への愛」という概念は、リードが『魂から心へ』の中で再発見した「自然的魂」の思想と、ジェームズやデューイのプラグマティズムの「生活・生命・生物(life)」の思想を、生態学的な経験概念を通して架橋したものであると考えられることができる。「自然的魂」の思想は、「感じ」を観念に先行するものであると考え、人間を含む動物に共通する「生のリアリティ」の基盤として考えるものであった。しかし、「感じ」を人間と動物との間で連続するものとしてとらえる一方、リードは、「感じ」を種の保存を動機づける性的な喜びに還元することはしない。生物には、それぞれが営む生活があり、そこにはそれぞれの仕方での「意味」や「価値」との「出会い」が存在している。多様な「出会い」に内在する喜びは、それぞれが異なる質をもつ多元的なものである。「生活への愛」という概念は、人間の喜びが他の動物との連続性を持つということを認めると同時に、人間の生(life)に固有の感じ(feeling)を伴うものであることをも認めるものである。喜びは生態学的環境を源泉として生じるものであり[NE:170]、生物がそれぞれの生活において出会うものである。

このような多元的生命の思想は、私たちが他者といかにして経験を共有できるのかという問題に、重要な視点を提供するものである。ジェームズが路上生活者であったホイットマンの詩を取り上げて論じたように、自分と異なる世界観をもつ他者が価値を感じる事物について、私たちはそれが取るに足らないものとみなしがちである[James (1899): 26]。そして、私たちはしばしばそのような他者を、「理解できないもの」として退ける。しかし、本当に彼が出会う事物には価値がなく、私たちはその「価値」を理解することができないのだろうか。生態学的に捉えられる「価値」とは、生活の中での「出会い」によって実現しているものであり、「意味」と「価値」は私たち生物が共有する環境の資源であると考えられる。ホイットマンが愛した生活を私たちが取るに足らないと感じるのであれば、それは私たちがその事物(things)の「価値」に気づくことができずにいるからであると考えられることができないだろうか。

「生活への愛」は、それがありふれたもの（common things）に基づいているからこそ、共有の可能性に開かれている。私たちは、他者が何かに感じる愛や喜びを完全に理解し尽くすことはできない。しかし、私たちは、他者が何かを愛する姿に触れることを通して、自分の理解は届かないが、彼にとって確かに存在している愛や喜びに気づくことができる。生態学的な環境は、生物に共通の（common）「意味」と「価値」の資源であり、私たちは他者の経験を理解しようと努めることで、私たちが未だ出会わざる「意味」や「価値」に気づくことができるのである。デューイが述べるように、人々は共通の何かをもつことによって、民主的コミュニティに生きることができる[Dewey (1916): 16]。リードの思想は、人の多様な経験と、その共通な生の基盤の双方を視野に入れることで、経験の共有へ向けたコミュニケーションの可能性を開くものである。

（３）アフォーダンスの記述と経験の成長

ここまで、リードの思想が、経験の共有と成長を目指す実践的な文脈を持つものであることを明らかにしてきた。ここで再び、他者の無限の経験世界を認める一方で、それを科学の対象として記述的に理解しようとするもののパラドクスについて考えてみよう。

リードの目指した科学を、他者の経験を十全に記述し、説明しようとする純粋科学としてみなすのであれば、リードの議論は矛盾を抱え、一貫性をもたない思想であるとみなされることになる。しかし、ここでリードが目指した科学を、経験の共有と成長のための道具として考えるのであれば、それは経験の十全な説明を提供しようとする純粋科学ではなく、デューイの言うプラグマティックな教育科学として捉えることができる。デューイは、経験科学が導き出す事実や法則は、教師に利用されることによって知的な道具性を持つものであると考えた。経験科学の内容は、それ自体が経験の事実を確認するものではなく、教師の再実践の中で検証されることによって教育科学となりえていく[Dewey (1929): 14]。以上のように考えると、アフォーダンスの記述は、次の教育実践の文脈の中で常に再解釈されることで、教師が子どもの経験の理解を更新していくための道具となるものである。子どもが会合する世界の豊かさが記述を超えたものである以上、子どもの経験を理解しようとする営みは、常にその成果が問い直される可能性を持ったものとして行われる必要がある。リードの経験科学は、経験の記述が終わりなき更新を伴う営みであることを引き受け、それでも経験を共有しようと試みる、探求としての科学であることで記述のパラドクスを乗り越えるのである。

リードの記述理論を、他者の経験を理解することへ向けた探求として捉えるのであれば、その記述理論が持つ限界を自覚しておくこともまた重要である。その限界とは、アフォーダンスの記述が、経験のひとつの側面を記述するものであって、生きられた経験全体を記述するものではないということである。アフォーダンスの記述とは、あくまで行動と環境の関係的事実の記述である。人間と環境との「出会い」に内在する経験は、確かに生きられたリアリティを伴うものであるが、環境との「出会い」を記述することによって、他者によって生きられたリアリティそのものが理解できるのではない。アフォーダンスの記述は、生きられた経験の条件である環境を記述し、経験の共通の地盤を見出していこうとすることで、未だ気づかれていない価値を理解しようとするものである。それは、カサ貝にとっての「価値」、レイヨウにとって

の「価値」、異なる世界観を持つ他者にとっての「価値」を理解しようとする営みであり、そのことによって理解しようとする側の経験を更新するものである。アフォーダンスの記述は、それによっては描ききれない経験世界の豊かさを開示することによって、さらなる探求と、経験の成長の可能性を開くのである。

5. 子どもにとっての「意味」と「価値」の探求—生態学的経験科学を通して

ここまで述べてきたように、リードの経験科学は、経験の共有と成長とを目指す実践的性格をもつものである。それは、教育実践研究における経験の記述理論としての意義を持つと同時に、教育実践研究のあり方自体を問い直すものでもある。

アフォーダンス理論は、教育実践における環境の「意味」と「価値」についての有効な記述理論となりうる。たとえば、幼児が散歩中に喜んで道端の溝を跳び、道端の壁を登るという行為はアフォーダンスとして記述可能である。溝や壁に対して「ぎりぎり跳ぶことができる」「ぎりぎり登ることができる」という挑戦可能性を探索することで、幼児は周囲の環境に教師とは異なる「意味」を知覚する。そして、幼児が日常生活の中で出会う「溝」は、その子にとって「跳ぶ」という「価値」を持ったものとして記述され、新たな視点から考察されることになる。生態心理学は、大人と異なる仕方では生きる幼児にとっての「意味」と「価値」を理解し、大人にとって未だ気づかれていない「意味」と「価値」に注意を向けていくための、環境行動の記述言語を提供するのである。

リードの記述理論は、確かに幼児にとっての「道端の溝」の価値を描きだす。しかし、ここで記述される「価値」は、幼児の生きる世界を理解するに十分なものではない。幼児の関心の源泉、幼児の生き生きとした生の源泉は、記述者にとってやはり「核心的秘密 (vital secret)」であって、「価値」の記述はさらなる理解の余地を残し続ける。記述の届かなさは、「なぜこの子はこれほど道端の溝を跳ぶのだろう」という問いとなり、子どもひとりひとりの「生のリアリティ」に注意を向け、それに寄り添った実践を行おうとする動機づけとなっていく。リードの経験科学は、教師と子どもが共有しうる環境の意味と価値を記述しつつ、子ども自身が感じている経験の内面的豊かさの多元性を認めることで、さらなる経験の理解へ向けたコミュニケーションを開くこととなる。リードの経験科学は、経験の共有と成長へ向けた、意味と価値の探求の理論として捉えなおすことができるのである。

また、リードの経験科学を教育実践研究論として捉えなおすことで見えてくるのは、教育実践研究が教師の生活と切り離すことができないという視点である。リードの「意味」と「価値」の記述理論は、子どもの経験を理解するための手掛かりが、子どもと共通の生活の中の、身近な環境にあることを指し示している。ひとりひとりの子どもの経験世界は独自なものであるが、教師はその生活の中で、子どもの経験の条件となっている環境を共有している。身近な環境との「出会い」に差異と共通点を見出すことは、他者の経験を理解し、成長していくためのきっかけとなる。教師と子どもが出会い成長する喜びの源泉は、ありふれた生活の中にある。経験の意味と価値を問い直す教育実践研究は、教師の生活から生まれた問いについて探求し、教師の生活の中で検証されることで発展していくものである。

一方、教師や実践研究者が、日々の教育実践の中で起こる現象を生態学的に記述することは、直接経験を言語化し、間接経験に変えていく行為であるという制限を持っている。アフオーダンスを記述し解釈を加えるという作業は、情報の選択と制限を伴うものであり、公共的に評価されていく必要がある。アフオーダンスの記述という行為は、実践研究者が自らの感性（感覚や感じの様式）を通して現象を切り取り、他の教師や研究者と経験を共有しようとする営みである。このような営みにおいて、記述者の解釈はバイアスとなるものではなく、それぞれの感性を通じた独自の子ども理解の視点を提供するものである。教育実践研究の質は、観察の客観性によって担保されるものではなく、記述を通して新たな子ども理解の視点を得る “実践性” と、観察者のバイアスをいかに民主的に取り除くことに成功しているかという、“公共性” によって保たれるべきものである。これらの評価がなされていくためには、「意味」と「価値」の記述が、多様な教師や研究者に開かれ、対話的に問い直されていく必要があるだろう。

子どもにとっての「意味」と「価値」を理解しようとする営みは、それ自体が他者とのコミュニケーションを通じた実践的な学びの過程である。リードの生態学的経験科学は、経験の成長という教育の過程の中で理解されることで、実践的思想として働くことになるだろう。

注

¹ ここでいう二つの著作とは、『魂（ソウル）から心（マインド）へ』と、『経験のための戦い』を指している。リードはこの2冊に『アフオーダンスの心理学』を加えた3つの著作について「三面からなる屏風」[EW:viii]であると述べている。

² 原語である *encounter* は、細田訳において「切り結び」と訳されており、選択的に環境の価値と関わるダイナミクスを伝えている。しかし、本論では *encounter* という概念が含意する内面的生の豊かさに着目するため、あえて「出合い」という訳を用いることとする。

³ 『魂から心へ』（菅野盾樹訳）にならい、“*feeling*”を「感じ」と訳した。ジェームズズやリードは、“*feeling*”という語によって、意識される「感情」の内容だけでなく、「感じること」という行為的なニュアンスを示している。「感じ」という訳語によってこの点を強調した。

⁴ デリダは、ハイデガーの「動物は世界という点で貧しい」というテーゼが人間中心主義を免れないものであると指摘している[Derrida (1987): 92]。「動物が人間の持つような世界をもっていない」という言明は、「石が世界をもたない」という言明とは明確に異なる。石の場合、世界は「純然たる不在」であるのに対し、動物の場合「世界を持ち得ることにおける持たぬこと」という形式としての貧困である。デリダは、この貧困が、人間の世界への開けを前提とすることで動物における存在者への通路を閉ざしたものであるとし、これを「欠乏＝剥奪」と呼んだ。

⁵ 一方、リードの経験概念は、人間の実存を可能にする言語の役割について十分な説明ができないという限界をもつことも事実である。リードは言語が人間を人間たらしめるものであることを認めつつも、それが言語環境内への参入の過程の中で生成していくものと考えていた。ボノボなどにも見られる「対象の指示」は、人間の場合「指し言語」（「これ」、「あれ」）によって表現されるようになり、しだいに目の前にない対象について語る「語り言語」へと発達していく（EW329）。このような論述は、あくまで言語の発達過程の説明にとどまるものであり、人間の実存的生の説明としては不十分である。

⁶ 「情報は経験の原因ではないが、経験の根拠である」[NE:143]

⁷ 間接経験は直接経験と密接な関係にあり、処理情報から得られる「意味」は、生態学的情報を基盤として成立している。例えばリードは、本に書かれている内容（処理情報）を読み取るためには、紙の質感やインクの染み（生態学的情報）を知覚しなければならないと述べる。しかし、紙自体もまた他者の手を加えられて作られたものであり、それに触れることはある意味では間接経験であると言うことも可能である。この点についてリードは十分に議論を展開できておらず、間接経験と直接経験の区分を厳密に定義することが難しいという問題が残される。

⁸ 「自らの仕方で」というのは、経験が個人に閉ざされていることを意味するのではない。リードは、経験が独力の情報探索という側面を持つ一方、生態学的情報に接する機会が他者によってアレンジされ、情報の探索の仕方（技術）が他者の情報探索の仕方から学習されるもので

もあると述べ、経験を他者との関係の中で生じるものとして捉えている。「生態学的視点から見ると、経験は人が所有するものというよりむしろ人が従事する学びの過程である」[NE:146]。

文献

- Branch, G.M. (1979). Aggression by Limpets against Invertebrate Predators. *Animal Behaviour*, 27(2), 408-410.
- Derrida, J. (1987). *De L'esprit: Heidegger et la Question*. Galilée. (港道隆 (訳)、2010、『精神について——ハイデガーと問い』、平凡社)
- Dewey, J. (1916). *Democracy and Education*. Dover edition, 2004, New York: Dover Publications. (松野安男(訳)、1975、『民主主義と教育』、岩波書店)
- Dewey, J. (1929). The Source of a Science of Education. (In *John Dewey the Later Works 1925-1953. Vol.5*, 1984, Carbondale: Southern Illinois University Press.)
- Gibson, J.J. (1979). *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin Company. (古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻 (訳)、1985、『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』、サイエンス社)
- Heidegger, M. (1983). *Die Grundbegriffe der Metaphysik*. Frankfurt: Vittorio Klostermann. (川原栄峰・セヴェリン・ミュラー (訳)、1998、『形而上学の根本諸概念：世界—有限性—孤独』、創文社)
- James, W. (1899). On a certain blindness in human beings, In *On a certain blindness in human beings*, 2009, London: Penguin Books.
- James, W. (1912). *Essays in Radical Empiricism*. New York: Longmans. (伊藤邦武 (編訳)、2004、『純粹経験の哲学』、岩波書店)
- 鯨岡峻 (1999) 『関係発達論の構築』ミネルヴァ書房
- Reed, E.S. (1996a). *The Necessity of Experience*. London: Yale University Press. (菅野盾樹 (訳)、2010、『経験のための戦い—情報の生態学から社会哲学へ』、新曜社) ※本文にて NE と表記
- Reed, E.S. (1996b). *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. Oxford University Press. (細田直哉(訳)、佐々木正人(監修)、2000、『アフォーダンスの心理学—生態心理学への道』、新曜社)※本文にて EW と表記
- Reed, E.S. (1997). *From Soul to Mind: The Emergence of Psychology, from Erasmus Darwin to William James*. London: Yale University Press. (村田純一・染谷昌義・鈴木貴之 (訳)、2000、『魂から心へ—心理学の誕生』、青土社) ※本文にて SM と表記
- 津守真・本田和子・松井とし・浜口順子 (1999) 『人間現象としての保育研究 (増補版)』 光生館

(臨床教育学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2013 年 9 月 2 日、改稿 2013 年 11 月 28 日、受理 2014 年 1 月 16 日)

Inquiry to Values and Meanings in Education: Through a Discussion of Edward Reed's Ecological Science of Experience

YAMAMOTO Issei

The purpose of this paper is to reconsider the methodology and epistemology of the research on educational practice through a discussion of Edward Reed's ecological psychology. I shall clarify Reed's concepts of "experience" and "encounter," connecting his three representative cross-sectional works written in the fields of psychology, history of thought, and social philosophy. Reed's first intention is to establish a descriptive methodology of human-environment encounters, under the influence of Gibson's theory of affordances. On the other hand, he has a philosophical tendency to support absolute and pluralistic experience, under the influence of Darwin's "underground psychology." This seems to lead to the paradox whereby we describe the indeterminate, unknowable, rich experience of others. However, it could be compatible if we reconsider his theory as a social practice that leads to the growth of experience, alongside a pragmatic view of education. I insist that his concept of "love of life" shows the common basis of sharing experience and his descriptive theory has practical value for teachers who inquire into children's lived experience.